



▲『踊るサテュロスとニンフのいる風景』クロード・ロラン（1646年）



## 芸術の秋

# 飛び込もう！ 油絵の世界

2016（平成28）年7月17日、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、東京・上野の国立西洋美術館を含む7カ国17施設からなる「ル・コルビュジエの建築作品」の世界文化遺産への登録を決めた。今回は国立西洋美術館の建物自体が世界文化遺産となったわけだが、この美術館の中にも多くの彫刻や、版画、絵画などの価値ある芸術作品が飾られている。今回はその中でも100点近く作品を所蔵している油絵を特集する。国立西洋美術館に限らず、多くの美術館で油絵作品は展示されており、所蔵数も多い。油絵の魅力とは何だろうか、また私たちにどういった存在になっているだろうか。あまり日常生活で触れることがない油絵の世界に飛び込んでみたい。

### 油絵の歴史

油絵としての技法が確立したのは15世紀のネーデルランド（現在のオランダ・ベルギー）であった。油絵の初期の作品としてはヤン・ファン・エイクの『アルノルフィーニ夫妻像』が有名である。その技法がイタリアへ伝わったことで当時のルネッサンス文化とあいまって大いに発展を遂げた。ルネッサンス期の作品には1506年頃のレオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』などがあり、次第に油絵に適したテクニックが生み出され、以降油絵は絵画技法の主体となっていた。国立西洋美術館にも、常設展として上の画像のクロード・ロランの『踊るサテュロスとニンフのいる風景』（1646年）や、クロード・モネの『睡蓮』（1916年）が展示されている。

日本に洋画が伝わったのは、明治維新の頃である19世紀のことであった。高橋由一や黒田清輝ら当時の日本人に大きな衝撃を与えた。

ところが近年の油絵はきっかけがないとまず出会うことがない。学校教育で教えるのは画材や保管場所に困らない水彩画であることもある。しかし何度も重ね塗りできる油絵は、実は初心者優しい。



◀教室の風景（2016年7月撮影）



▲厚東先生（提供：アトリエ中野）



▲授業中のひとコマ（2016年7月撮影）

## 油絵の魅力

ここからは油絵の魅力について、中野区中野にある「アトリエ中野」代表の厚東裕三先生にお話を伺った。

—まず油絵と水彩の違いについて

「水彩の場合は絵の具を紙に吸収させていくのですが、油絵は吸い込まない、上に重ねていくんです。例えば描き始めの時には非常に気持ちの充実している日だったとしますよね。完成まで10日間かかったとすると、その間に自分の中で気持ちに変化が絶対あるんです。それが絵にすべて反映されてくるんです。そういうおもしろさがありますよ。」

—他の絵画にはない油絵独特のものは

「油絵のマチエール（でこぼこした画肌のこと）、これは水彩画やパソコンで描いたもの、それとはまったく違います。触覚的だし、目にもでこぼこした触覚的な感覚があるし、あとは実際にでこぼこがあることによって光が当たって陰影ができますよね。全てのものはのっぺりしてみているのではなく、目に手ごたえがあるんです。そういうマチエール感というのは人には多分非常に必要なものだと思います。」

—教室ではどんなことを教えていますか

「はじめて絵を描く人は緊張しまくっている。最高のものを描こうとか、ちゃんと描こうとか。だんだん間違えていいんだとか、いいとこ悪いとこ全部が絵なんだと、半ばあきらめのようなものも入りつつ希望も持ちつつ。初めは緊張するんだけど、自分はこんなもんだと思ったところで結構リラックスできるんですよ。そうやって上達していく

んです。教室

では一から始

める場合、絵

画の歴史で

はなく自分の

現在の力をど

うやったら出

せるかという

ことを教える

す。本を見て

勉強しようと

しても、無駄

になってしま

う場合が多い。

素材を理解し

て描くというこ

を教えます。鉛筆

だったなら鉛筆

を生かす

使い方。

おもしろいと思

うのは、なんで

人は絵を描くの

か。絵を

描くことという

のは、日常生活

とは違う部分

の頭を使っ

ている。日常生

活というのは

物を処理して

いく時間のつ

ながりではな

いかなと思っ

たんです。絵

を描くことと

いうのは、き

ちんとできて

なくてもいい

から、考え

たり組み立て

たりする時

間。生活の中

で無意識に認

識している

ものを顕在

化していく。

普段は意識

しないものを

じっと見ると

いう、絵を

描くというこ

とはそういう

ことなんです

しょう。」

—油絵の魅力は一言で言えば

「独特のハリと

色の輝き、で

しょうね。で

なければ人

は追

い求めない。

## まとめ

『油絵のすすめ —初めての絵筆から個展まで—』の中で、著者の林謙一さんは伝えている。「絵を描くことほどよい気晴らしはありません。それも、一枚の絵をいつまでも加筆したり、訂正したり、削ったり、またその上へ描いたりできる「油絵」ほどよいものはないのです。しかも相手が必要とせず、ひとりで愉しめるホビーです。」

宮廷画家など「職」として存在していた中世ヨーロッパとは違い、今日日本で、油絵を描くことで生計を立てていくことができる人は一握りしかない。しかし、今回インタビューした厚東先生も「趣味をちゃんと続けている人は、仕事もちゃんと放り出さず実績を出していく人なんだなと思います。趣味を充実させることで仕事の方にもいい影響が出ているように感じます。」と話している。油絵は現代の私たちにとって、自分の中から何かを生み出すことができ、キャンバス上で思いのまま発散することができる、自分と向き合っていくこともできる、とてもいい表現活動である。油絵を一人で描き始めるのは難しい。材料にも道具の使い方も油絵独特のものがあるし、油絵の用具は高額なものが多いため、はじめは絵画教室を覗いてみるのはいかがだろうか。

また、図書館にある多くの画集や解説書を見て、過去の画家がどんなことを思っただけ描いたのかなど、思いを馳せてみることもいい。好きな画家を探し、気に入った作品があれば美術館で鑑賞し、油絵にしかない「マチエール」を楽しむ。芸術の秋、そんな時間の過ごし方をぜひオススメしたい。



～ご案内～

『アトリエ中野』  
〒164-0001  
東京都中野区中野 2-11-6 丸由ビル 2・3 階  
☎ 03-5385-8415  
中野駅南口からなかのZERO方面に徒歩3分

～参考文献～

『油絵のすすめ —初めての絵筆から個展まで—』  
林謙一／著 1977  
所蔵：中央  
『油絵のすすめ』  
吉田敦彦／著 2014  
所蔵：中央